

## 閉会あいさつ

放送教育開発センター所長 加藤 秀俊

加藤 どうもありがとうございました。まず何よりも、こうしてはるばる方々から足をお運びいただいたことに、心からお礼を申し上げます。また、これから申し上げることを、お心の隅にお止めいただいて、この開発センターをこれからもご利用いただきたいと思うところがございます。閉会の言葉でございますので、長広舌は振るいませんが、今日お話を伺っていて気が付いたことや感じたことを3点ほど申し上げたいと思います。まず第一は、遠隔学習、遠隔教育という言葉でございますが、よく考えてみますとそもそも学習というのは、人類史始まって以来、遠隔なのです。私共は通常遠隔と言いますと、空間的な遠隔をすぐ考えてしまい、東京と大阪とか、或いは名古屋とニューヨークとか、熊本と幕張とか、地理空間で考えてしまいます。しかし、時間軸を入れてみますと、学問の進歩というのは、時間的大遠隔学習なのです。我々が今、プラトンを読み、孔子を読み、些かの知識を持っているのは、先人の残した書物を読んでいるからでして、その書物を著した人は、3百年前に亡くなり、或いは50年前に亡くなっている。そういう人達の本を読んでいる限り、少なくともゲーテンベルグ以前から文字というものが発明されて以来、我々の知識というのは時間的な遠隔学習によって成り立ってきたわけです。そこにこの放送とか電気通信とか様々な知識が入って参りましたので、今度は空間の方の遠隔というのが、プラスされたのが現代という時代であろうと感じるわけでございます。ですから、遠隔学習論というのを空間だけで考えないで、時間軸を考えれば、それほど新しいことではあるまいというのが、第一点でございます。

第二点、今日の午前と午後の2つのセッションの関係でございますが、午前の部を伺っておりますと、メディアもここまで来ている。或いはどこまで行くのかという感じのすさまじいものでございました。バーチャル・リアリティーというお話も今日ありましたが、現にNHK放送技術研究所では、ハイビジョンのドラマ番組が出来た場合、人間がショック死を起こさない範囲内のスリラー番組というのは、どこにあるかという大実験をなさっているそうです。以前ハイビジョンの実験を当センターでやりましたが、眼鏡をかけますと本当に3次元になりまして、水族館の中に入ったような気がするわけです。しかし、これは殺人現場とかに連れられて行きますと、それはショック死する人間が必ず出てくるわけで、どこまで耐えられるかという実験をしておられる程度まで、ハイビジョンも来ております。今朝様々な技法技術のご紹介がございましたが、いずれも我々の夢と申しますか、ひょっとすると悪夢の部分があるかもしれませんが、我々が将来接しうるであろうという様々なメディアのご紹介がありました。つまりメディアはもうここまで来ている。そして、どこまで行くのかというのが午前中でございました。

午後は、大学はまだここにいるということでございまして、それを喜多村先生は相性の悪い夫婦といわれたのですが、終わりの方になってきますと、大学と文部省の方も何か相性がよくないみたいで、相性の良くないものばかりで、大いに反省いたしました。しかし、メディアと

というのは、とにかく言語活動、象徴活動が出来てから以来ずっと続いております。旧石器時代から我々人類、或いは高等の哺乳類、霊長類はメディアを使ってきました。メディアというものは古いが、「メディア論」は新しいのです。大学の方も先程喜多村先生が中世以来とおっしゃいました。大学史というのは、読めば読むほど、奇々怪々になることがたくさん出てくるのでございます。大学は古いのですが、「大学論」は新しい。大学とメディアというものは、ひょっとすると相性が悪いのか折り合いが悪いのかわかりませんが、メディア論と大学論というこの二つの新しい知的探求の場というのは、決して折り合いの悪いものではありません。これが、折り合いが悪かったら、我がセンターが存在するそもそもの存立の理由がないわけではございまして、大学論とメディア論というのは、私共が今共同でこれから開拓していこうとしている領域でございまして。そんなわけで、午前の部と午後の部と両方向いながら、私共がこれからやっていかなければいけない仕事のめどが幾つか出てきたようでございます。多少、キザなことを申し上げますが、「マルチメディアの文化と科学」という題を見ますと、私共の世代はまずリッケルトを思いだしたり、或いはC. P. スノウを思い出したり、これはここ半世紀ほど変わらない話が、少し舞台を変えてまだつないでいるという感じがしないでもありません。しかし、皆様のご協力によりまして、文化と科学、まさしく「マルチメディアの文化と科学」というのを私共はこれから探求していきたいと思うのです。ちょっと、わき道にそれますが、先程も喜多村先生が、大学というのは非常に保守的であるととおっしゃいましたが、その大学の先生は、電話というメディアの隠れた大ユーザーでございまして。例えば、教授会などでは、そこそこに発言をなさってお互いに目配せをしながら、うちに帰ると今度は電話網が鳴り響きまして、とりわけ人事案件などがある時は、教授の家というのは常にお話中というのが実態です。それほどハイテクではないが、電話というものをしょっちゅうお使いになっているわけです。決してメディアと大学とは関係がないわけではなく、電話回線無しに大学教授会というのは成り立たない。ちょっと脱線しましたが、決して折り合いが悪いわけではなく、いろんなところで使われております。

さて、このメディアもここまで来ている。どこまでいくのかという話と、大学はまだここまでしか来ていないのかという2つを折り合いをつけながら、私共これから作業を進めていかなければなりません。先程来草原課長から、お話がチラチラと出ておりますリフレッシュの問題、これを継続学習というのか、リカレント教育というのか、いろいろと表現はございまいしょうが、そもそもこの高等教育とは何かという小松さんの問いに対して、私なりに今考えていることを申しますならば、18才人口を相手にした伝統的な大学だけが大学、高等教育機関ではありません。制度にのっかった大学というのは、非常に新しいものでございまして、いつでも誰でもが自分の好きな方法で知識を手に入れられるという学習者中心の絶えざる教育のチャンスを与えてくれるのが、高等教育というものであろうと思っています。その為には、実はこのマルチメディアというのは非常に大事なことなのでございまして、テレビで学習することも出来る。パソコン通信でデータベースを検索することも出来る。そして先程濱野さんがおっしゃったことと関連するのですが、今私共が葉書を書いたり、電話をかけたりのと同じように、衛星通信の端末なども、後20年もすれば、ごく日常のことになるに違いない。技術系の方に伺いますと、今、通信衛星受信用の装置というのは、この前まで直径1.2mなければいけなかったとい

うようなものが、今やアタッシュケースくらい、場合によっては弁当箱くらいの大きさにまで小さくなって来ているそうでございます。どこまで実用化されていくのかわかりませんが、そうしますと衛星通信の端末にいつでも触ることも出来るし、パソコンにも触ることが出来るし、電話も使えるし、ファクスも使えるし、教室に通うことも出来る。そういう学習者の側がメディアを選べるというのが、実は「マルチメディアの文化と科学」の教育との関わりで、たどり着いていく点なのではないだろうかというようなことを考えます。

私共のセンターも、お陰様でこれで13年目を迎えます、これから先どういう方向に進んでいくか模索中です。今日午前中のデモンストレーションも実は、去年通信衛星で初めて大阪の国立民族学博物館とつなぎましたときは、私共は勿論でございますが、実務担当の方が出来るものかどうかというので、大変緊張されておりました。しかし、二度目になりますとかなり慣れてくるのです。これが3度4度と重なってきますと、もう電話をかけるのと同じくらいに、また今日も話そうかという調子に必ずなるに違いない。今朝の大阪とのやり取りをご覧になっていて、こんなことが出来るのかとお感じになった方もいらっしゃるかもしれませんが、後10年も経てば、こんなことは日常茶飯になります。ちょうど50年前に電話が新しかったのと同じように、或いは30年前にテレビが珍しかったのと同じように、10年前にパソコン通信が、極めて希有なものであったと同じように、こういうものはどんどん陳腐化して参りますから、この通信衛星による東京と大阪の二元テレビ会議などを珍しそうにご覧になるのは、これが多分最後のチャンスではないでしょうか。これからはこんなことは、日常当り前のことになるに違いないと思います。今回のシンポジウムのこの記録も多くのことを学ばせていただきながら、将来のメディア研究者或いは高等教育研究者にとって、昔はこんなことをやっていたのか、といわれる議事録になるに違いありませんし、そうあって欲しいというのが、私の気持ちでございます。少し時間超過いたしました。感想をこめましてこの辺で私の最後の御挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。ご参加の皆さまにもここで厚く御礼を申し上げます。